夏

池上遼一

その日はうだるように暑く
いい知れぬ臭いが人々を支
配していた……

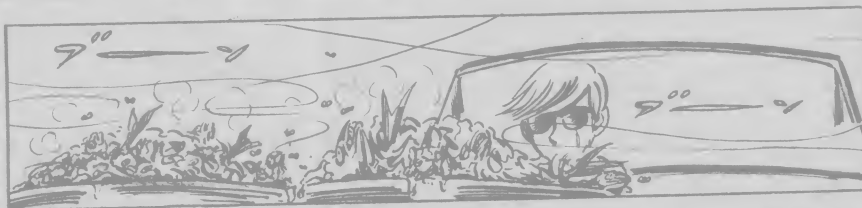
ギラ
ギラ
ブーン
ブーン
ブーン
ブーン
ブーン
ジジジ
ジジジ
ジジジ
ジジジ
ジジジ
ああ！
頭が
火のように
熱い……

また逢ったね

君とはなぜこうして偶然にしか逢えないのだろうこの君の家の前で……

逢う時はいつも頭が火のように熱くてここが東京の何処なのか僕には見当がつかない

おや また体中に蝿を集まらせた狂人か 君は何度同じ事を……

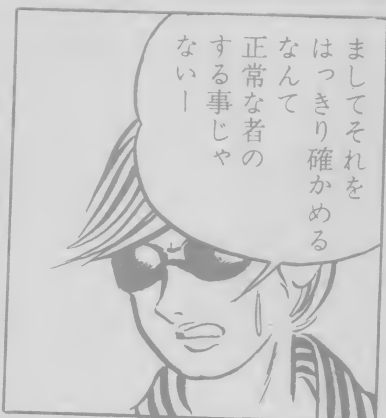
なにも言わなくてもいい解ってるさ

この外の欅の木に面した部屋に内側からすっかり窓を締めきって君だけがいたっていうんだろう
すると室内にいつのまにか蠅が三匹翔んでるじゃないか
君は腐ったものが室内にあるのではないかと捜しはじめる
ブーン
ブーン
ブーン
ところが室内にはいくら捜してもそんなものはなかった自然に蠅が室内に発生する訳もない
ブーン
君は執拗にその事を気にしはじめるんだ
そのうち君は恐しい事を想像してしまった
ジジジジ
僕には最初から君の想像した事はおよそ見当はついていたけどね
………
するとどうだろうしめきったはずの窓枠の隅が少し開いていてその隙間から一匹の蠅が室内に入ってきたではないか！
私じゃないわ

ハハハハ まったく ばかげた話だ窓の 外にその体中 蠅を集まらせた 狂人がいたって 訳さ
この近くの 汚い町にゴロゴロして いる奴なんだ暑さの ためたまたま日影を 求めて歩くうち君の 家の欅の木を見つけて この窓の下で休ん でいたんだ つまり蠅を 室内に運んだのは その狂人だった 訳だよ ただそれだけの 話だろう
エヘヘへへ
それを 君は何度 同じ事を……………… なぜだか今までは ここで僕は 君と別れてし まうんだ…… 気がついたら
東京の 自動車で 停滞している 洪水の真中に ポッンといたりする そんなときいつも 灼熱のガス塊が 頭上真近に照り つけていて 暫くすると
また頭が 燃えるような 感じがする するといつのまにか 僕は君の 姿を見つけ てるんだ
そして 同じセリフを 君は僕に 繰返させる ……
エヘへへへへ
君は何度同じ事 を繰返したら 気がすむんだ それで解決したじゃ ないか………って でも今は違う らしい

まさか君は二匹の蝿が室内を翔びまわり始めてた時外にはまだ狂人は来ていなくてそれから暫くして隙間から一匹の蝿が入ってきた時初めて狂人がそこに来て休んだのかも知れない……なんて考えているんじゃないだろうね

そうするといったい最初の三匹の蝿は何処から発生したのか？……ってくだらない事を……

疲れてるんだ君は……あんな恐しくってばかげた想像は忘れるんだ

ましてそれをはっきり確かめるなんて正常な者のする事じゃないー

そんなばかな事がある訳がない

まさか君は……

確かめるわ

こいつをその汚い町まで運ぶって！………ど、どうしてもというんなら仕方がないそうだなそうすれば君が
まったく本当にくだらない想像をしていた事に気がつくだろう

ズルズル

この暑さで完全に精神も肉体も腐っちまったらしいよ

腐りかけた肉の臭いと蠅……吐気けがする

アー

ここらで別な意味で二人ははっきり確かめようじゃないか

君とは偶然にしか逢えないなんて

ぼくはたまらないんだ

あ

ギャイイー!

神経の鈍い犬だすっかり判断力を失っている暑さのせいだろう

まあ
臓腑が
汚い
……

それなのに君はいつも同じ事をそしてきょうは逢うなり狂人の運搬、作業じゃないか

とにかくきょうこそ僕は君にはっきりした返事を訊こうと……

………

なぜ君はこの話になると黙ってるんだ……

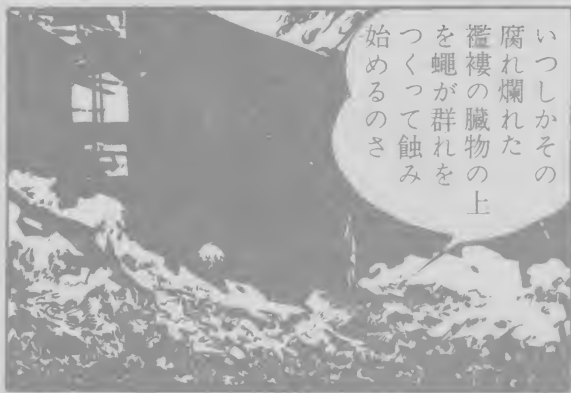
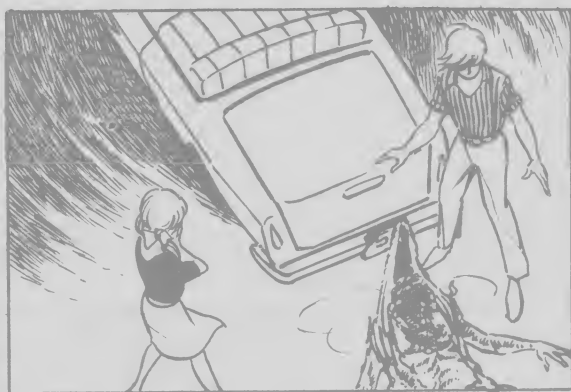
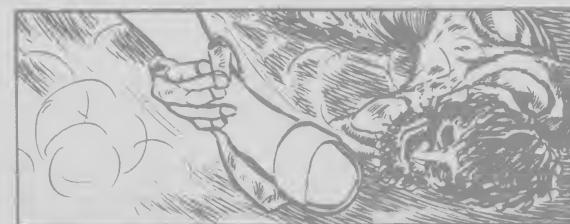
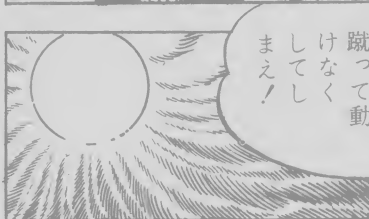
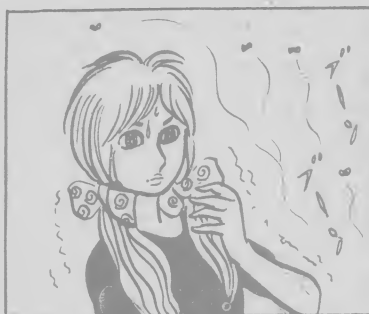
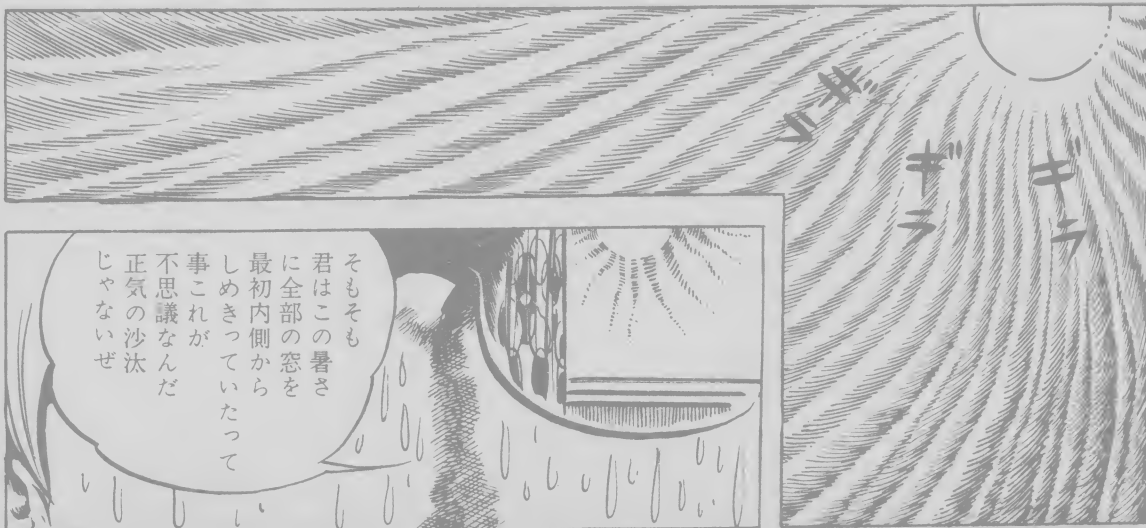
顔が真青だよ

蝿よ

私の手

まだ蝿の事を!

ガタガタ

僕が蠅をどんなにか嫌っているって事
君は知らなかったのか…ああ蠅が群れを！
灼熱のガス塊がジリジリと照りつけるとこういう町はまるで排泄物を処理できなくなった巨大な臓物みたいになって
あたりは腐った魚腑に似た悪臭をはなち始める
そしていたるところに青白い大きな蛆虫がかたまって這ってるんだ

いつしかその腐れ爛れた襤褸の臓物の上を蝿が群れをつくって蝕み始めるのさ
他にもこういう場所が有るって事を僕は以前から知っていたでもいつも近よらないようにずっと避けてきたんだ
まるで自分の体の内部を眺めているようで……そしてさらに強く意識させるかのように嘔吐をもよおしてくるからだ
この流れる臭気の烈しさ！蝿の群れの唸り！
醜悪さの限りをつくしたこんな場所へ僕らを来させたのは誰なんだいや君じゃないあの狂人だあいつのせいなんだ！
たまたま隙間から入ってきたんだよあの蝿は…それなのに窓の外に狂人がいたばっかりに…
ハッ

君は僕がどれほど蝿を嫌っているかって事知らなかったのか

そんな奴もっともっと蹴って動けなくしてしまえ!
そもそも君はこの暑さに全部の窓を最初内側からしめきっていたって事これが不思議なんだ正気の沙汰じゃないぜ

でも僕は君の言う通りにしてきた今もこの通りすっかり窓はしめたもう外には狂人はいないぜ

勿論一匹の蝿も入れないように建具の隙間には新聞紙をつめたし

もう完全に蝿が外から入ってくることは考えられない

……

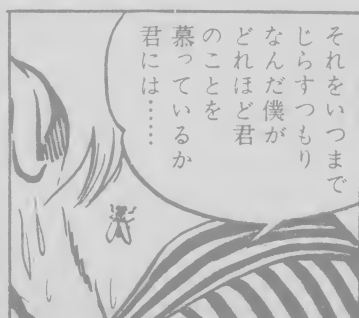
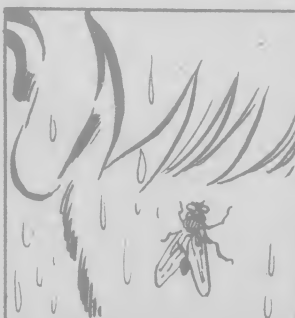
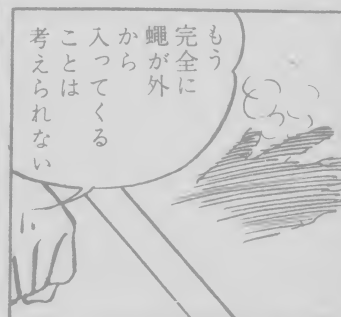
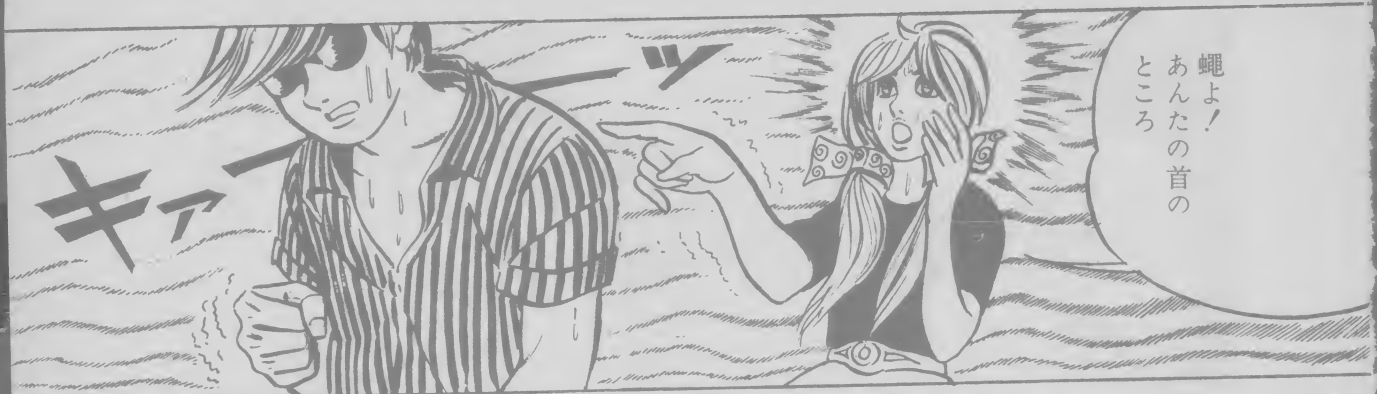
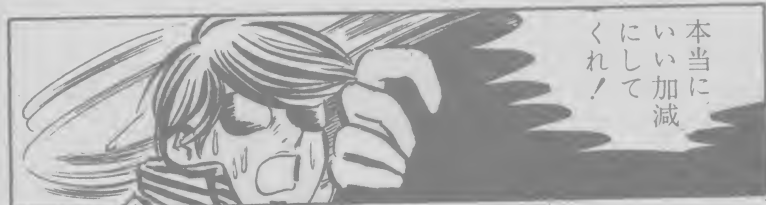
ドンタン
ドンタン

さっきから三時間も過ぎたよいい加減にこんなばかなことはやめようよ！

僕はきょうこそはっきりした返事を訊こうと思って君の言うなりになってるんだ

それをいつまでじらすつもりなんだ僕がどれほど君のことを慕っているか君には……

蝿よ！
あんたの首の
ところ
キァーーーッ

私じゃないわ
あんたが
さっきあの
汚い町から
運んで
きたんだわ！

本当に
いい加減
にして
くれ！

僕には
わかってるんだ
君が想像し
た事は……
だからだから
もうやめてくれ
これ以上は！

出てってえ！

ハハ

ハハハ
ハハハ
ハハ……

ああ！
やっぱり
口から
蝿が！

君までが！
それじゃあ
あの時の僕も
アーウ
ハハハハハハ

まさか
実際に……
僕は
信じない！

ウィーン

ウィーン
それとも
僕
眼が
いや頭が
どうか
しているのか
ジジジジ

そんな
はずは
ない！
ジジジジジジ

僕の場合
も確実に
口から翔び出し
ていた
二度も見
違えるはず
がない！

ああ厭だ厭だ夏は
なにもかもすぐ腐っちゃうわねえ

さっきの犬よ

厭らしい蝿

まあ見てよ

人間まで腐ってるみたい！

エヘヘヘヘヘヘ

口から出た汚物……腐肉の臭いと蝿……

ヨロ

ヨロ

エヘヘヘヘヘヘヘヘヘ

人間まで腐ってる……そうかやっぱり

夏になるとあの町全体は巨大な臓物みたいになって悪臭をはなち始めるそしていたるところに青白い大きな蛆虫がかたまって這っていたっけ

僕はそいつを眺めると自分の体の内部を眺めているような気がしてきた

エヘヘヘヘ

どんな事があってもそれを僕は隠し続けたかったんだ…人が口にする言葉とは別に心の奥にあるうしろ暗いものを隠し続けているように…

いったい君は東京の何処にいるんだ！

なぜ偶然にしか逢えなかったんだ！……

ああ！そしていつも頭が火のように熱いときにしか……僕は狂っているのか!?

ジジジ

ジジジ

ジジジジジジジ

ガヤガヤ
ガヤガヤ
ガヤガヤ
ガヤガヤ
ガヤガヤ
魚市場のトラックとスポーツカーの衝突だ！
ブーン
凄い蝿だ
ブーン
ブーン
気違い運転？
ブーン